

福澤諭吉の失意

南北を含む朝鮮には、国家間の合意、協定、条約を軽視し、時にこれを覆して恬然たるところがある。北朝鮮は一九九四年に米朝枠組合意を飲んだものの、核開発を継続、これが公然のものとなるや、ほどなくして合意は崩壊した。一事が万事である。

韓国とて同様である。二〇一五年末の慰安婦問題に関する日韓合意は、これをもって「最終的かつ不可逆的に解決」したという、外交においてはこれ以上ない表現をもって決着した。とはいえ、韓国の世論は憤懣やるかたなしだったのであろう。すべての法律の上に「国民情緒法」なる不文律が「君臨」する国である。変転きわまりない国民情緒が合意破棄を政府に強いることだつて大いにあり得る。

日韓の国交が樹立したのは、一九六五年の日韓基本条約ならびに同時に締結された日韓請求権・経済協力協定によるのである。そこには両国間の賠償請求権は「完全かつ最終的に解決された」とうたわれていた。韓国側から再交渉など言い出されないうやにとの日本側の強い懸念を込めての表現であつたに

渡辺利夫（拓殖大学理事顧問）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究所博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十一月より現職。

違いない。しかし、やはり慰安婦問題や徴用工問題等での執拗な反日的攻勢である。

斯る國人に対して如何なる約束を結ぶも、背信違約は彼等の持前にして毫も意に介することなし。既に従来の国交際上にも屢ば実験したる所なれば、朝鮮人を相手の約束ならば最初より無効のものと覚悟して、事实上に自ら実を収むるの外なきのみ

日清戦争の勃発前、日本が提起した「日清共同内政改革提案」に朝鮮政府が応じ、親日派の金弘集を首班とする内閣が組成され「甲午改革」に打って出ようとした。しかし、三國干渉により遼東半島還付の屈辱に甘んじた日本を、朝鮮は「恃むに足らず」とみて半島に新しく勢力を張るロシアに急接近し、改革は頓挫。金弘集は親露派の民衆によって光化門前で撲殺された。先の文章は、この報に接して福澤諭吉が『時事新報』に掲載した論説の一部である。後半生を朝鮮の近代化にかけた福澤の失意の論説である。一二年前の福澤の絶望は、半島を怜悧に見つめる現在の日本人のものでもある。